

遠藤周作著

# 小説「沈黙」論

小畑進

## 一、「顕偽録」中の一文

徳川初期の排耶書の一つに沢野忠庵の「顕偽録」がありま  
す。例の不干斎ハビアン（一六二〇・元和六年）の「破提字子」  
と同じく、転びバテレンのもので、沢野忠庵とはポルトガル  
人司祭イエズス会士セバスチャン・フエレイラ（一五八〇・  
天正八年一六五〇・慶安三年）が転び後の禪宗檀徒名です。  
彼は三十才の頃（一六一一・二・慶長十六、七年）必死の  
覚悟を抱いて渡来。家康による禁令（一六一一・慶長十七年）  
下に、高山右近の追放をはじめ、京都、長崎、江戸での大量  
殉教の時代を潜行して布教に献身すること二十有余年。その  
間の彼の初志の程は「顕偽録」冒頭に彼自身の言葉によって  
次のごとく録されています。

改宗の無数の果実、聖人のように忍耐された無限の迫害と難  
儀によって確固（しつかり）していそうに見えたフエレイラ  
神父が、天主の正しく計り知れない審判によって、哀れに沈  
没した（日本切支丹宗門史下二五五頁）。かくて、吉利支丹を  
鬼利志端と呼び、伴天連を罰天連と書きかえつつ、排耶書「顕  
偽録」が世にあらわれることとなったのです。

道心堅固なるイエズス会士、しかも日本管区長（プロビン  
シアル）の地位にありしフエレイラ棄教すの報に「偶像崇拜  
の徒はこの破滅を喝采（かさい）すれば、イエズス会では実に苦い涙を  
流した」ことでしょう（パジェス・日本切支丹宗門史下二五  
五頁）。一大衝撃をこうむった伝道界は、或いは名誉挽回のため、  
或いは孤立無援の日本信徒維持のため、或いはフエレイ  
ラ悔悛を期して続々と日本潜入を企て、上陸しては捕縛・殉  
教して行きました。

フエイラは転び後、宗門改奉行井上筑後守政重に利用され  
て宗門目明しをつとめ、後輩司祭たちの取り調べ究明の通訳  
にあたったり、踏絵を銅板にすることにあずかったりしたと  
云われます。ために三十人扶持を給せられ、元中国人の富商  
の寡婦であった日本婦人を妻として、二人の子供をあげ、七  
十才で没しました。

彼の「顕偽録」は、一六三六・寛永十三年の作ですから、  
彼が転んで三年にして成ったわけですが、その翌年に勃発し  
た島原の乱（一六三七・寛永十四年一三八・十五）、また彼の  
雪辱のために潜入したマストリリ一行の殉教（一六三七・

「吾若年之時ヨリ鬼利志端宗旨ノ教ヲ而已業トシテ、竟ニ  
出家ヲ遂ゲ、為レ長此道ヲ日本ニ弘メンコトヲ思フ志深ク  
シテ、数千萬里ヲ遠トセズ、日域ニ至リ、此法ヲ萬民ニ教ン  
ガタメ、多年ノ間、不レ厭ニ飢寒勞苦」、山野ニ隠レ形、  
不レ惜ニ身命、不レ怖ニ制法、東漂西泊シテ此法ヲ弘  
ム」と（昭和二年日本古典全集版五頁）。

かくて、彼は日本に荒れ狂う迫害の嵐の有様と、その中に  
巻きこまれて殉教してゆく者たちの壮烈さを通信しては世界  
を奮起せしめました。

しかし、ついに縛につき（一六三三・寛永十年）、長崎で穴  
吊の刑に処せられること五時間、棄教を約したと伝えられま  
す。彼およそ五十三才の頃のことです。レオン・パジェスの  
言葉を借りますと、「拷問五時間の後、二十三年の勇敢の働き、

寛永十四年）や、ルビノ一行の殉教（一六四二・寛永十九年）  
に直面しての彼の心境は、はたしていかなうのものであった  
ことでしょうか。殊に白州で通訳をつとめつつ、ルビノから  
面責されたときのその胸中のほどは思いやられることです。

しかし、ルビノ第二隊として潜入・逮捕されたシリール出  
身のジュゼツベ・キャラ（一六〇一・慶長六年一六八五・  
貞享十二年）は、先輩フエレイラと同様に棄教し、元岡本姓  
の後家を女房として岡本三右衛門の日本名を名乗らせられ、  
十人扶持の身分で切支丹屋敷の座敷牢内に八十四才の長命を  
生きました。その間、彼もフエレイラの「顕偽録」に類する  
破戒の書を書き残しますが、その文書がのち最後の潜入バテ  
レンたるヨワン・パッチスタ・シドツチの尋問にあたった新  
井白石の参考資料となったことは白石の「西洋紀聞」にも明  
らかなところ です。

しかし、なぜフエレイラは棄教、いや背教までしたのだし  
ょうか。一概に拷問による肉体的苦痛のゆえとのみはなしえ  
ないように思えます。何しろ彼はあの恐るべき時代を二十年  
余も「不レ惜ニ身命、不レ怖ニ制法」、東漂西泊シテ此法  
ヲ弘ム（一六三六・寛永十三年）の人だったのですから。そこで、彼の転びの証文た  
る「顕偽録」がとりあげられるわけで、事実、彼はギリシタ  
ンの教えを録しつつ一々反論しています。

「然ハアリト云ヘドモ、日本ノ風俗ヲ見、儒釈道之理ヲ聞、  
千分ガ一曉ニ其旨一、悔レ迷改レ非、為レ是、吾鬼利志端  
ノ宗旨ヲ捨テ、釈氏ノ教ニ心ヲ留故、鬼利志端（一六三七・

此ヲ是トスルニハアラザレドモ、非ヲ説テ理ヲ知ラセンタ  
メニ、アラアラ云顯テ、文〔又か〕鬼利志端宗旨トナ  
ッテ邪法ニ習差シヌル万民ノ戒トス」云々と（前掲書  
五頁）。

或いは、この「顕偽録」の文字の裏には宗門改側の強制的  
意志の眼が光っているのかも知れないのですが、その反論の  
内容たるや、さして強力なものではなく、彼ほどの人物なら  
ば、みずからの反論に対して、みずから返答できるようにも  
思われるのです。

ただ、その全文を読んで何となく格別な響きをもって心に  
残るところが一個所あります。それは十戒中の殺生戒に関す  
る一文です。プロテスタントの区分けでは第六戒となってい  
ますが、フエレイラはロマ・カトリック流に第五戒として、  
次のように述べています。御熟読ください。

「第五、人ヲ殺スベカラズトノ法度ナレドモ、宗旨ノ上ニ  
付テ餘多ノ人ヲ殺也。譬バ罰天連ノ隱置ク者一人ノ覺悟ニ  
ヨツテ、多ノ人ヲ殺コト、是殺生ニアラザルヤト尋問バ、  
普ク衆生ヲ助ケンタメニ宗旨ノ法ヲ弘ルニ、其教ヲ會得セ  
ズシテ、宗旨トナルモノヲ殺コト、是吾殺生ニアラズ、他  
ノ作ス殺生也ト答。鬼利志端經文ニ、其國ノ風俗ヲ見、吾  
法ニ思ツカザル國ヲ去テ、信ズル國ニ弘ムベキト見エタリ。  
然ニ背レ法宗旨ヲ立ルコト、其身ノ殺生ニアラズヤ（前掲  
書十二頁）。

これは、どうみても殺生戒そのものの真つ当な言説ではあ

りません。それは異様に屈折し、一種訴えるような陰影を宿  
しているように読めます。私の想像ですが、かのフエレイラ  
が、その転びの心境を、他のどの個所にでもなく、この個所  
にひそかに書きとどめて、百年のちに知己を得ようとした  
か、と感ずるのですが、いかがでしょうか。

「譬バ罰天連ノ隱置ク者一人ノ覺悟ニヨツテ、多ノ人ヲ殺  
コト、是殺生ニアラザルヤト尋問バ」

とは、他ならぬ彼自身の体験であつたかも知れません。事実  
彼は「不レ厭ニ飢寒勞苦」、山野ニ隱レ形したと冒頭に録  
していたのです。そして、

「普ク衆生ヲ助ケンタメニ宗旨ノ法ヲ弘ルニ、其教ヲ會得  
セズシテ、宗旨トナルモノヲ殺コト、是吾殺生ニアラズ、  
他ノ作ス殺生也ト答」

とあるのも、かつて彼が山野に姿を隠し、また百姓家に隠し  
置かれて名乗り出ないために、多くの者ら、それこそ彼の目  
からすれば「其教ヲ會得セズシテ、宗旨トナルモノ」等が、  
ひつ捕えられ、殺されるところとなつたことに對する彼の悶  
々たる苦衷を映し出していたのではないのでしょうか。これを  
しも、「是吾殺生ニアラズ、他ノ作ス殺生也」としておられ  
ようか。もとより、自分はギリギリまで、それは「他の作ス  
殺生也」と自問自答していたのであるけれども、ついに堪え  
られなくなつた。「普ク衆生ヲ助ケンタメニ宗旨ノ法ヲ弘ル」  
使命のゆえに、と信徒たちにさとされ、また自分にも云い聞  
かせて隠し置かれては生きて来なければ、このままにして

推移せんか、「普ク衆生ヲ助ケン」との素志に反して、多くの  
衆生を殺すことになる、との現実意識が、この一文に折りた  
たまれているように読めるのです。

そして、フエレイラ、いや転んだ沢野忠庵は、「鬼利志端  
經文ニ、其國ノ風俗ヲ見、吾法ニ思ツカザル國ヲ去テ、信ズ  
ル國ニ弘ムベキト見エタリ。然ニ背レ法宗旨ヲ立ルコト、其  
身ノ殺生ニアラズヤ」と結びます。つまり、聖書の中にさえ  
風俗風習からして、どうしても教に向かない、聞かない国か  
らは去つて、もつと信ずる国に布教すべきであるという原則  
があつたではないか。それを、その聖書自体の原則にも背い  
て、なおも強いてこの日本国に、その宗教を立ててゆこうと  
するのは、いたずらに殺生される者の数を増すばかりです。  
むしろ殺生戒を破り抜けること、自分自身が殺生するもので  
はないか、と叫ぶのです。自分の存在そのものが殺生の源と  
なるという恐しい体験……。フエレイラのなめた迫害、その  
捕縛の状況、ましてやその際の心事については文献上見聞す  
るところがありませんが、この僅か五行ばかりの文字の中に  
その間の経緯が、どす黒く浮かび上つて来るのを憶えるので  
す。

もちろん、この言葉と思ひとは、多年かれの胸中に湧き上  
つては渦巻いていたものでしょう。この苦悶はフエレイラな  
らずとも、彼のような立場に立つた者ならば誰しもが胸中に  
するものでしょう。そして、もしも彼が転ばなかったら、こ  
れは彼の心の中に秘められたまま他人知れず消え去つて行つ

たことでしょう。

さて、すでにお気づきのことと思いますが、遠藤周作氏の  
小説「沈黙」にはフエレイラ沢野忠庵は実名で、キヤラ岡本  
三右衛門はロドリゴ岡田三右衛門と変名されて登場しており、  
その両者のからみあいも、転びにいたる心情も、そのままあ  
らわれています。小説「沈黙」の主題は、まったく「顕偽録」  
中のフエレイラの苦悶に尽きていたのです。はたして、遠藤  
氏がこの「顕偽録」中の一文を味得しておられたのかどうか  
寡聞にして私は知りませんが、小説「沈黙」がフィクション  
であるのに対して、「顕偽録」は史実であり、当時者の生の  
文字なのです。私には二百数十頁にわたる小説の「語り」よ  
りも、この当人の僅か五行にも足りない「呻き」に心うたれ  
るのです。

そして、世上、小説「沈黙」が提出した問題とか、日本人  
遠藤氏が提出した問題とかと云われるものが、実は遠藤某な  
る日本人が今日提出した問題ではなくて、あの恐怖時代を、  
初め司祭として、のち探偵・犬として生きた外国人・ポルト  
ガル人フエレイラが突きつめて提出した問題だったのです。

このことは、色々な意味において今後とも大事にされてゆか  
ねばならないと思います。さて、以上のような背景を背負つ  
て小説「沈黙」に入つてゆかねばなりません。文芸批評は  
初めてのことで、おそらく破格のものになることはおゆるしく  
ださい。

## 二、「沈黙」の問題点

作者はあちらこちらで、とかく安手に定式化され、美化された在来の通念なるものを打ち破ろうとします。こういう作業は、ともすると自虐趣味に墮する危険を伴うものなのですが、たとえば殉教の死というものが、決して綺麗ごとの聖人伝に描かれているような輝やかしいものではなくて、ひたすらにみじめで辛いもの（76、77）、愚劣でむごたらしいもの（157）であったところや、捕縛の体験のあつけない（105）、また迫害者と云えば青白い陰険な顔をした悪魔とばかり思っていたのに、実際はものわかりのよきそんな温和な人物の姿をしていたこと（146）などの描写は、分をわきまえて啓蒙的であり、語るべきところを語ったものと思われまゝ。

また、古き佳き時代の宣教師たちの安穩とした樂觀論の錯誤（84、167）、宣教師の驕（おご）り（115）、或いは幾世紀にもわたって画家たちの手で描かれたキリスト像の皮相美（86、87）などに対する批判はよくきいています。

そのほか、文章技巧上で印象に残ったところとしては、草原いっぱいにハーブの糸のようにひろがる雨の幕の美景が、いきなり蠅のとびまわる人間の排泄物の臭氣に一転するところや（89）、捕縛された司祭ロドリゴが、小さな白瓜を女から渡されて、「鼠のように前歯を動かした」と描写されているところなどは、いかにも白人特有の狭い歯並びが白瓜を食む有様を生き生きと映し出していました（107）。

において、交際においてと、それこそいたるところで大なり小なり、この二つが背反してしまうことに基づくのです。

この小説の主人公・司祭ロドリゴが立たされたのは、彼が転ばなければ信徒が半死半生に痛めつけられて虐殺される、というギリギリ結着の窮地だったのです。ロドリゴは、もちろん「私だけを罰して下さい」と願いますが、それは笑殺されて、「お前さまが転ばねばな、百姓どもが穴に吊られ申す」「深き穴の中に五体逆さにされて百姓どもは幾日も……」と、突きつけられます（119）。

そして、彼よりも先に同じ窮地に立たされていた恩師で穴吊りの傷あとも恐ろしいフエレイラも、みずからの経験を語ります。「お前が転べば、あの者たちはすぐ穴から引き揚げ縄もとき、薬もつけようとな。わしは答えた。あの人たちはなぜ転ばぬのかと。役人は笑って教えてくれた。彼等はずう幾度も転ぶと申した。だがお前が転ばぬ限り、あの百姓たちを助けるわけにはいかぬと」（221）。

そして、後輩ロドリゴに向かってせまります。「お前は彼等より自分が大事なだろう。少くとも自分の救いが大切なだろう。お前が転ぶと云えばあの人たちは穴から引き揚げられる。苦しみから救われる。それなのにあなたは転ぼうとはせぬ。お前は彼等のために教会を裏切ることが怖ろしいからだ。このわしのように教会の汚点となるのが怖ろしいからだ」、「わしだってそうだった。あの真暗な冷たい夜、わしだって今のお前と同じだった。だが、それが愛の行為か……」（222）。

しかし、こうした第二義的な点は別として、この小説が「沈黙」する神を主題として、もっぱら訴えようとした問題は、およそ次の三点にまとめられることができるでしょう。

- 一、神への忠誠か隣人への愛情か
- 二、強者に対する弱者の救い如何
- 三、日本の体質は基督教に向くか

この、神と人間、強者と弱者、基督教と日本という問題はいずれも積年のものであつて、その一般的・公式的な算術的解答は軽々に出すべきものではなく、聖書に聞き、神の御言葉の組上にのせて深く了解すべきものであらうと思うのですけれども、以下、愚感を述べて責めをはたさなければなりません。

### (1) 神と人間

かつて主イエスは「律法のうちいずれの誠命か大いなる」と問われるや、「なんじ心を尽し、精神を尽し、思いを尽して主なる汝の神を愛すべし」これは大いにして第一の誠命なり。第二もまたこれにひとし、「おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし」律法の全体と預言者とは此の二つの誠命に拠るなり」と答えられました（マタイ22・37、38）。

このことは周知のところ、神に対する献身的な愛と共に隣人に対する親身な愛が平行して示されたのです。けれども、不幸にして今日の我々の場合でも、この二つが時として蹉跌（さつてつ）をきたすのです。平行せずして逆行する事態に落ち入るのです。入信のとき、献身・就職・結婚の際、また職業

自分一人が犠牲になるだけで事をすますことはできない。

自分一人の行動のゆえに他衆が犠牲にされる。自分一個の節操が同胞の苦死に通ずる。主に忠ならんと欲すれば兄弟たちに酷となる。ここに神への忠誠と隣人への愛情とが全く対立したものとして凝結されるのです。「どっちをとるか」、また「どっちかをとらねばならぬもの」として対置されるのです。この二者択一的な危機に面して、読者は「もしも自分だつたらどうする……」と息をひそめ、固唾（かたつ）を呑むことでしょう。そして、実はこのような時にこそ、神の絶対的意志が歴然とあらわれ、十字架の険（きび）しきは身にせまるのです。日頃口なれた信仰的決断なるものが、いかなるものであつたかを実感させられるのです。はたして、ロドリゴはいずれをとるのか……

先を急ぐ前に、今ひるがえて考えてみますと、神をとるか人をとるか、神への忠誠か人への愛情か、という問題に直面しては、いやしくもキリスト者たるものは、人をとって神を捨てるといふことは、もちろんありえないのですが、同時に神をとるからといって人を無碍（むがい）に捨て去るということもありえないはずで、神に対する愛と隣人に対する愛とは二つながらキリスト者が負う使命であるのですから。

この窮地に立つて主人公ロドリゴは、人への愛をとることによって暗黙のうちに神への愛を合わせとらんとするのです。隣人への愛情の前に神への忠誠を伏せることを神の愛に通じさせようとするのです。

神か人か——この両極に飛散せんとする弾丸の如き二つを必死にひきもどして一つの方向に、人に対する愛情の方向にまとめて平行せしめんとする、この背反する二律を一元化しようとの努力、エネルギーが、この小説のクライマックスであり、ロドリゴとフエレイラとのやりとりの数頁は、本書の圧巻であり、白熱的なくだりです。

「司祭は基督にならって生きよと言つ。もし基督がここにいられたら。フエレイラは一瞬、沈黙を守ったが、すぐはつきりと力強く言つた。『たしか基督は、彼等のために、転んだらう』……。『そんなことはない。司祭は手で顔を覆つて指の間からひきしほるような声を出した。『そんなことはない。』基督は転んだらう。愛のために。自分のすべてを犠牲にしても。』これ以上、わたしを苦しめないでくれ、遠くに行つてくれ』(222、223)。かくて、一元化は愛、しかも人への愛のゆえに、基督の名において期されてロドリゴは踏絵を踏むのです。

しかも、作者はこれこそ「今まで誰もしなかった一番辛い愛の行為」である(223)と共に、「今までしなかった最も大きな愛の行為」であると、フエレイラに語らせ、踏んだために「教会の聖職者たちはお前を裁くだらう。わしを裁いたようにお前は彼等から追われるだらう。だが教会よりも、布教よりも、もっと大きなものがある。お前が今やろうとするのは」(224)、大熱弁をふるうのです。

それだけではありません。作者はキリスト御自身にさえ、

「踏むがいい」と、あえて語らせるのです。「その時、踏むがいいと銅板のあの人は司祭にむかつて言つた。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負つたのだ。こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた」(225)。かくて、この小説最大の山場は終結します。

作者は、「あとがき」で次のように明記しています。「ロドリゴの最後の信仰はプロテスタンティズムに近いと思われるが、しかしこれは私の立場である。それによって受ける神学的な批判ももちろん承知している」と(256)。つまり、ロドリゴが文字通り踏み切った立場は作者自身のよしとする立場であることが、たしかめられるのです。

さて、ロドリゴは、そして実は作者は、いわゆる二者択一のな危機に面して「人」をとることによつて、そのうしろ手で神をあわせとる図式を示したのですが、ならば、それとは逆に、「神」をとることによつて人をあわせる道もあったのではありませんか。寡聞にして作者の言う「プロテスタンティズム」とは、いかなるものかは知らないのですが、むしろ神への愛に突き入ることにおいて隣人への愛を止揚してゆくことを願ひ信ずるのが聖書の基調であり、プロテスタンティズムの基線ではありませんでしたか。

聖書中の「人もし我れに來たりて、その父母・妻子・兄弟・己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず」(ルカ14・

26)、或いは「おおよそ我が名のために或いは家、或いは兄弟、あるいは姉妹、あるいは父、或いは母、或いは子、或いは田畑を棄つる者は数倍を受け、また永遠の生命を嗣がん」(マタイ19・29)という主の御言葉は、もとより形式的に神をとつて親兄弟などは打ち捨ててしまへ、ということではなく、少くとも神に焦点をあわせることによつて兄弟たちをあわせ見るといふ線であつたのではありませんか。そして、およそ宗教というものは、こういう視点に立つものではありませんでしたか(たとえば「三教指帰」序文、「正法眼藏隨聞記」第三・十四、「歎異抄」第五卷など参照)。少くとも、人をとることによつて神をあわせるという線ではありません。重ねて申し上げますけれども、人間にもたれこんで神を遠望するのではなく、あくまでも神に視点を据える。或いは据えさせられる線での収束を、この視点での決裁を、私は「プロテスタント」として願つたのです。また、それでこそ神の神たるゆえんを知れる宗門作家の作品としての意義を持ちえたものではありませんか。にもかかわらず、小説「沈黙」は、内容の熱情はともかくとして、結果的には、長与善郎の「青銅の基督」や、堀田善衛の「海鳴りの底から」に描かれた切支丹像にこもるほどの宗教性が稀薄であり、言いすぎかも知れませんが、一般世間の人情物語にキリスト教的紛飾をほどこしたもののようになさえるときがあります。たとえば、島原城を舞台にした「海鳴りの底から」の作者は、登場人物中もつとも豊かな人間性を有する切支丹大江源右衛門に次のように語らします。

「三万七千余の、島原天草の人民が、この周囲四十丁の一郭にあつて眠っている。その巨大な眠りの底に秘められてゐるものが、どこかに届かぬということはない。必ずそれはどこかに届くであらう。しかし、どこへ、いつたい届くのだ。……あの真つ暗な夜空の奥に届くよりほかに、届くべきところはなないのだ。つまりそれは、絶望ということだ。その夜空の奥処(おくが)に、どうすはいるという。手短に言つて、つまりそれは絶望ということだ。どうすは森羅万象をつくりなされ、あだんといわをつくられた。このときほどに、いや、このときはじめて大江源右衛門は、吉利支丹の神が、この世に超絶しているということの怖ろしさをしみじみと感じた。幕府、藩、人民——敵、味方という相対を超えている。三万七千余の寝息が、たとえ天に届いても、それは聞き入れられるというかたちで戻つて来るといふものではないであらう。ではどうなつて戻つて来るのか。どうなつて戻つて来るのかは、わからない。源右衛門はただ、それはたしかに戻つて来る、という思想をえただけであつた。戻つて来る——それが信仰というものであり、がらぎ(恩寵)の本体というものではないのか。それは厳酷そのものなものであるらしい。大江源右衛門は、眠つた(新潮文庫版91、92)。ここには突き放して沈静した宗教性があります。これと比較しても小説「沈黙」はあまりにも通俗的な作品と言わねばなりません。とまれ、島原城三ノ丸を最強の砦として敢闘して果てる大江源右衛門とロドリゴの姿とは重ならないのです。

宗教とは常識的な人間の論理に対しては異常なものなのであり、神の主権を人間の情愛の中に曖昧にしたり、見失ってしまったりは成り立たないものであることを銘記させられなければなりません。いや、ことは宗教に限ったことではありません。主君のため一子千松を犠牲にした「伽羅先代萩」の母政岡、塩治家への忠誠のため妻子をも無にする「仮名手本忠臣蔵」十段目の天川屋義平などの厳しさと対比しても、小説「沈黙」の人間へのもたれこみは、作者の軽い作品と通じて、その甘さにむせてしまふのです。

すでに長身にしても、堀田にしても、或いは芥川にしても自分をあの稀有な切支丹の原体験の立場に置いて主人公となる鳥詩（おこ）がましさを避けて、側面から描きました。それが彼らの宗門作家でない分限でもあり、また実は賢明なところだったのですが、小説「沈黙」の作家は、生命どころか信仰までもかけた極限状況に追い詰められる一司祭の立場に立ち、ついには何とキリスト自身とも成って振舞うのです。はたして、それが宗門作家のなすべきことであつたのか、私には疑問です。むしろ逆のように思うのです。

しかも、ロドリゴが転ぶことをキリストがあわれんだとか苦しんだ、というのではなくて、積極的に「踏むがいい」と語らせたのです……。私には、ここに軽い作者の体質を見るような気がします。

はたして、聖書のキリストには、「踏んでもいい」と語らせ

る余地が見いだせるでしょうか。「われ地に平和を投ぜんために来れりと思うな。平和にあらず、かえつて剣を投ぜんために来れり。それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をそのしゅうとめより分たんだためなり。人の仇はその家の者なるべし。我れよりも父または母を愛する者は、我れにふさわしからず。我れよりも息子または娘を愛する者は、我れにふさわしからず」(マタイ10・34・37)、「身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。……さればおおよそ人の前にて我れを言いあらわす者を、我れもまた天にいます我が父の前にて言い願わさん。されど、人の前にて我れを否む者を我れもまた天にいます我が父の前にて否まん」(マタイ10・28・32・33)といった周知のキリストの御言葉が俄然光茫を放つて暗闇に輝き出します。

また、この主イエスの声を背にした信徒たちの覚悟の一端をあらわす次のヘブル書の記者の言葉に照らしても、小説「沈黙」が悲壯風に奏でた旋律が安易なもののように聞こえてくるのです。「女は死にたる者の復活を得、ある人はさらに勝利たる復活を得んために免さるることを願わずして極刑を甘んじたり。そのほかの者は嘲笑と鞭と、また縄目と牢獄との試練を受け、或る者は石にて撃たれ、試みられ、鉄鋸にて挽かれ、剣にて殺され、羊、山羊の皮をまといてへあるき、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、(世は彼らを置くに堪えず)荒野と山と洞と地の穴とに

さまよへり。彼等はみな信仰によりて証せられたれども約束のものを得ざりき。これは神は我らのために勝利たるものを備え給ひしゆえに、彼らも我れらともならざれば、全うせらるる事なきなり」(ヘブル11・35・40)。

しかし、どうも作者は一つの予測——聖書と言えども、また主キリスト御自身でさえも、ロドリゴが立たされたような窮地、すなわち自分一人を捨てて事をすませるのとは違つて己れのために隣人が苦しむという窮地については予測していなかったと考えているようです。事実、作者はフエレイラをして「もし基督がここにいられたら」と語らせ、「たしかに基督は、彼等のために、転んだだろう」、「基督は転んだだろう。愛のために。自分のすべてを犠牲にしても」と重ねて言わしめているのです。

しかしながら、すでに前記の御言葉の視野には、ロドリゴが立たされた窮地も入っているように思えるのですが、それよりも何よりも、考えてみると、実はキリスト御自身こそロドリゴの立場に今日も立ち尽すお方であつたのです。申すまでもなく、主イエス・キリストは、まず他衆のために御一身を犠牲にされました。しかし同時に、主イエス・キリストはその御自身のゆえに、何と多くの他衆を、何とおびただしい兄弟たちを悲惨きわまりなき殉教者の道に追いやられたお方だったことでしょうか。そして、今日もその「なんじら我が名のゆえにすべての人に憎まれん、されど終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし」という御言葉は、良心的な信徒の腹背を突

き(マルコ13・9・13)、「世もし汝らを憎まば、汝等よりさきに我れを憎みたることを知れ。汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我れなんじらを世より選びたり。このゆえに世は汝らを憎む。わが汝らに『僕はその主人より大いならず』と告げし言をおぼえよ。人もし我れを責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。……『ひとびとゆえなくして、我れを憎めり』と録したる言の成就せんためなり」と「無情」にも宣しておられたのです。

愛弟子ペテロには一般的でなく直接個人的に、「誠にまことに、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時はみずから帶して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん」と、その非業の最後を宣せられ(ヨハネ21・18)、「使徒パウロについても、『我れかれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』と明言しておられたのです(使徒行法9・16)。

しかるに、小説「沈黙」には、この重大な視点が欠如しており、その視野での展開は皆無でした。ただロドリゴが悲劇の主人公となつて、そのロドリゴをも苦悩せしめる今一人の真の主人公の世界は捨象されてしまつてゐるのです。ここにこの小説の情熱が真に巨大な宗教的世界と対する厳肅さに遠く、人間的なじょうぜつに通じてしまふゆえんがあるのでしよう。

私にはむしろ宗門外の長身が、ついに切支丹になり切れない

かった南蛮鑄物師・萩原祐佐に語らしめた次の言葉をこそ真正面から受けとめねばならぬと思います。「人間の魂が救はれると言ふ事の爲めにはそれほどの肉体の犠牲がどうしても必要なものであろうか。天地はもつと悠々としたものである。

其の天地の中に人間が生かされてゐる處にはもつと自由と、赦しとがあつていい訳である気がする。そうでないとしたら人間にその犠牲にすべき肉体を態々与えた者は余りに無慈悲である。『一方が不正な爲めだ。基督教が残酷なのではない』と彼は考えた。しかしそう考えても何だか基督教は厳酷にすぎ

る人のやうに思はれた」(「青銅の基督」新潮文庫版61)。

ともかくも、ロドリゴが転ぶとしても上記の聖書そのものの中に貫かれてゐる線において、それが宗教というものの絶対性・峻厳性におののくことで収束されれば……と思つたのですが、キリスト自身にすら声を発せしめて居座り、居直つたことは、どうしても分限を超えたもの、或いは軽々しきとして断ぜられるもののように思ふのです。少くとも「ロドリゴの最後の信仰はプロテスタンティズムに近い」と言われたプロテスタントは、どのような顔をしたらよいのでしょうか。

## (2) 強者と弱者

次の強者と弱者の問題は、先の神と人間との問題において作者がついにロドリゴに名をかりて人間に視点を置いたことと切つても切れない問題であり、その神に対する人間に踏みきつたことを「神学的な批判ももちろん承知して」正当化せんとすることは、すなわち言うところの弱者の立場を肯定せ

んとするものであることは申すまでもありません。

もつとも弱者と強者と言つて、私には人間は——或いはキリスト者はと言つた方がよいでしょうが——みな本来的・性的に弱い者であると思ふのですが、一応作者の意に従つて弱者と強者という言い方を用いていきたいと思います。

さて、その言うところの弱者の見本のようなキチジローは海底に石のように沈められて殉教したモキチやイチゾウを尊敬しつつも、「モキチは強か。俺らが植える強か苗のごとく強か。だが、弱か苗はどげん肥しはやつても育ちも悪う実も結ばん。俺のごとく生れつき根性の弱い者は、パードレ、この苗のごとくです」(11)、「俺は生れつき弱か。心の弱か者には、殉教さえてきぬ。どうすればよか。ああ、なぜ、こげん世の中に俺は生れあわせたか」(214)と悲嘆をもらすのです。

作者自身の言い分も、「キチジローの言うように人間はすべて聖人や英雄とは限らない。もしこんな迫害の時代に生れ合さなければ、どんなに多くの信徒が転んだり命を投げだしたりする必要もなく、そのまま恵まれた信仰を守りつづけることができたでしょう。彼等はただ平凡な信徒だったから、肉体の恐怖に負けてしまったのだ」と、はっきり表明されています(11)。

しかし、キチジローどころかロドリゴ自身も、「私は聖人ではない、死ぬのは怖ろしい」と思はずもなし(116)、恩師のフエレイラさえ転んだとすれば、「とても自分にも、これか

ら見舞つてくる試験は耐えきれぬかもしれぬ」との不安をおぼえ(121)、「私たちはあなたが試験のために癲病にされたヨブのように強い人間ではない。ヨブは聖者ですが、信徒たちはまずしい弱い人間にすぎないではありませんか。試験にも耐える限度があります。それ以上の苦しみをもうお与え下さいますな」と祈り(127)、「私は駄目になるのだろうか」と震えながら考えた。聖寵が自分に勇氣と氣力を与えてくれなければ、これ以上、もう耐えられぬかもしれぬような気がする」とおののき(128)、ついにみずからは一度も穴吊りを経験することなく、信徒たちの悲痛を思いあまつて転ぶにいたるのです。

転んだのち、彼は「なぜ卑しい抗弁を今更やろうというのだ」と自責しながらも、「私は転んだ。しかし主よ。私が棄教したのではないことを、あなただけが御存知です。なぜ転んだと聖職者たちは自分を訊問するだろう。穴吊りを受けている百姓たちの呻き声を聞くに耐えなかつたからか。そうです。そしてフエレイラの誘惑したように、自分が転べば、あの可哀想な百姓たちが助かると考えたからか。そうです。でもひよつとすると、その愛の行為を口実にして自分の弱さを正当化したのかもしれない。それらすべてを私は認めます。もう自分のすべての弱さをかくしはせぬ。あのキチジローと私とにどれだけの違いがあると言ふのでしよう。だがそれよりも私は聖職者たちが教会で教えている神と私の主は別なものだと知っている」と語り(229)井上筑後守から岡田三右衛門の名をもらいながらも、「私はあなたを恨んでいるではありません

せん。私は人間の運命にたいして嗤っているだけです。あなたにたいする信仰は昔のものとは違いますが、やはり私はあなたを愛している」と語りつづけるのです(244)。

作者はまた巻末近くでも、なおロドリゴのあとを追つてきたキチジローの口を通して、「この世にはなあ、弱か者と強か者のござります。強か者はどげん責苦にもめげず、ハライソに参れましようが、俺のように生れつき弱か者は踏絵は踏めよと役人の責苦を受ければ……」ともらさせ、「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しなかつた」と誰が断言できよう」と断言するにいたるのです(247)。

作者は護教文学や布教文学的通念に對して、クリスチャンも一個の人間だとすることを意図したのでしよう。たしかに聖書中の名だたる人物、この作者が強い人間・聖者と呼ぶヨブでさえも、時として目をおおわしめる生身の弱さを曝露しました。そういう人間的な弱さの面をあらわして世が押しつけるキリスト者像を修正し、かつはキリスト者自身の思いあがつた虚像を打破することには、それ相應の意義がありましよう。そしてそれは人間の本来的な隣れむべき弱さ脆さを知らしめるという聖書自体の意図にも合致しているとも言えましよう。

しかし、だからと言つて、聖書は弱者の弱さをそのまま肯定したのでしょうか。「我れは富めり、豊かなり、乏しき所なし」とするラオデキヤ人たちに、主は眼薬を買つて目に塗り「おのれの悩める者・憐れむべき者・貧しき者・盲目なる者

裸なる青」たるを知れ、と命ぜられます。しかし、その己れのみじめさを思い知ること能事は終るものではありません。「このゆえに、なんじ勵みて悔改めよ。……勝を得る者には我とともに我が座に坐することを許さん、我れの勝ちを得しとき、我が父とともに其の御座に坐したるが如し」として、弱者は其の強者・勝者に向上するのです。なんじは冷やかにあらず熱きにもあらず、我れはむしろ汝が冷やかならんか、熱からんかを願う。かく熱きにもあらず、冷やかにあらず、ただ微温がゆえに我れなんじを我が口より吐き出さん」として、微温的な態度から熱きものへの向上が期されているのです（黙示録3・14、22）。

時として、あまりにも無惨な弱さを曝露した聖書の主人公たちは、ロドリゴのように、その弱さにもたれこみ、それを肯定したり、居座ったことでしょうか。「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかつた誰が断言できよう」と居直り（247）、さらには、「私は聖職者たちが教会で教えている神と私の主は別なものだと知っている」などと、むしろ他者に優越した思いに満たされたでしょうか。

違います。聖書はそのような微温的な強がりとはちがって、弱者の弱さは、はっきりと弱さであるとしています。その平面では聖書は弱者肯定ではありません。弱者の弱さは強くされてゆくべきものとして扱えられています。弱きに墮した聖書中の人物たちも、みずからの弱さがあるべからざるものと

して、それが強められんことを願い、かつ目ざして、ついに強者として立ち直ってゆくのです。第一、彼等はロドリゴのようにじょうぜつではありません。彼らは黙して絶望するか、悔いの中にへりくだり、立ち上ろうと切望します。自責の涙の中にひれ伏し、強められて、雪辱して行きます。

作者はキリストをして、「今、お前（ロドリゴ）に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ」と重大なことを語らせ（247）、ロドリゴの線上にユダをおさめようとしているのですが、当のイスカリオテのユダ自身は、ロドリゴのような自己肯定のじょうぜつをもちあらず、ただ「われ罪なきの血を流りて罪を犯したり」と一言して、みずから縊れ果てたのです（マタイ27・4、5）。

英雄的使徒パウロも、「誰か弱りて我れ弱らざらんや、誰かつまずきて我れ燃えざらんや」と叫び（コリント後書11・29）、「庄せらるること甚だしく力耐えがたくして生くる望を失い」と戦慄しました（コリント後書1・8）。しかし、だからと言って、彼はそこに土俵を描いたでしょうか。そうではなく、「心のうちに死を期するに至」った彼は、「これ己を頼まずして、死者を甦えらせ給う神を頼まん為なり」と展開し、「神はかかる死より我らを救い給えり、また救い給わん。我らは後もお救い給わんことを望みて神を頼み、汝らも我々の為に祈をもて助く」と向上するのです（コリント後書1・9、11）。

遠藤氏のロドリゴには、おのれの弱さにおもねり、もたれこむ不遜な一種の強さと自己義認の感傷の翳りがさ

しています。同じ弱さを自覚しても、「キリストの能力の我れをおおわんために、むしろ大いに喜びて我が弱きを誇らん……それは我れ弱き時に強ければなり」と神におのれを投げうつパウロには謙虚な向上心が溢れています（コリント後書12・9、10）。弱さがそのまま居たまま肯定されてゆくのではなく、弱さが神の力によって放下され、高められて、強さに昇華しているのです。

世間の過度に理想化されたキリスト者像に対して、キリスト者だって生身です、とことわることは有用であったとしても、ただそれだけで終って安易な露悪趣味であって、生身のその弱さを克服して精進する自責の方向を失ってしまったならば、悪びれるだけになってしまふことでしょうか。それこそ、親鸞にも許されぬ造悪無碍、本願誇りの徒となってしまうことでしょうか。弱さが弱さとして告白され、しかしその弱さが強さを目ざすことが聖書の旋律なのです。弱さそのものが不遜の強さとなるのではないのです。

作者は大村に護送される船上のロドリゴに、「聖寵が自分に勇氣と氣力とを与えてくれなければ、これ以上、もう耐えられぬかもしれぬような氣がする」と語らせてはいます（128）。けれども、この小説全体を通じて、神へのつばきや問いのじょうぜつは聞こえても、聖寵を求める祈りの声はあまりにも小さく、その聖寵によって強められることを願う苦闘の世界は、ほとんど展開されずに終りました。天に聖寵を求める

世界の貧弱さ、不毛さは、この作品の、或いは作者の盲点であり、ついに神を「沈黙」せしめるカラクリは、そこにあったと言えるかもしれません。

弱者と強者について、先にも申しましたように、本来の性来的にはみな弱者なのではないでしょうか。その間の差というのは五十歩百歩の程度ではないのでしょうか。ユダヤ人を懼るるによりて戸を固く閉じて青ざめていた弟子たちが、一変して「ユダヤの人々およびすべてエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ」と獅子吼する勇者・強者となったのは（使徒行法2・14）、聖寵あつてのことではありませんでしたか。信仰上の弱者と強者との相違は、聖寵の有無・多少にあると言えましようか。それを求めることに連らなると言えましようか。

弱ければ弱いほど、なぜ私に聖寵を求めなかつたのか」という声がほしい氣がするのです。宗門作家であるならば、いや宗門作家こそ知っているはずの聖寵の強さ、いや少くとも聖寵を求めることにおける苦闘の軌跡を描いてもらいたかつたと思うのです。それが結局「たとえあの人は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた」というロドリゴのひとり言で閉巻するのです（248）。

この小説の読後感と、「このゆえに我れはキリストの為に弱き・はずかしめ・患難・迫害・苦難にあうことを喜ぶ、それ我れ弱き時に強ければなり」という御言葉とは、いかにしても共鳴しないように思えるのです（コリント後書12・10）。弱



さの中にこそ生きる宗教的意志の問題は情緒的な閑居のたたずまいの中に終息しているのです。

いわゆる浄土教的低徊趣味や安易な自己肯定根性は、「五体の一つ亡びてゲヘナに投げ入れられぬは益なり」といった主イエス御自身の御言葉によつて（マタイ5・29）、常に目ざめさせられて行かなければなりません。読者の中には、ロドリゴの独演よりも、かえって井上筑後守がロドリゴ岡田三右衛門に突きつけた一言に何ものか貴重なものを聞きえたのではありませんか。「かつて余はそこと同じ切支丹バードレに訊ねたことがある。仏の慈悲と切支丹デウスの慈悲とはいかに違うかと。どうにもならぬ己の弱さに、衆生がする仏の慈悲、これを救いと日本では教えておる。だがそのバードレは、はつきりと申した。切支丹の申す救いは、それと違うとな。切支丹の救とはデウスにすぎただけのものではなく、信徒が力の限り守る心の強さがそれに伴わねばならぬと。してみると、そこもと、やはり切支丹の教えを、この日本と申す泥沼の中でいつしか曲げてしまったのであろう」と（242・243）。これに対して作者の分身たるロドリゴは「基督教とはあなたの言うようなものではない」と叫ぼうとしますが、「しかし何を言っても誰も——この井上も通辞も自分の今の心を理解してくれまい」として、言いかけた言葉を呑みこむのです。しかし、井上の言葉に対してロドリゴが「基督教とはあなたの言うようなものではない」とするその基督教とは、きつと「プロテスタンティズム」ではあるまいとは予

測できるのです。

### (3) 基督教と日本

「そこもと、やはり切支丹の教えを、この日本と申す泥沼の中でいつしか曲げてしまったのだらう」と、井上筑後守は転んだロドリゴに申しましたが、すでに神よりも人間、強者よりも弱者にもたれこむこと自体が日本の体質だと言うならば、正にこの小説のメッセージ自体が、その好見本となるのです。が、事実、この小説には「日本泥沼論」が並べ立てられます。それもほとんど何の掘削も究明もされぬままに。作者はフェレイラ忠庵にも語らしめます。「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」（194）。「この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない。彼等の神々だった」（195）。「基督教の神は日本人の心情のなかで、いつか神としての実体を失っていた」（196）。「この国で我々のたてた教会で日本人たちが祈っていたのは基督教の神ではない。私たちに理解できぬ彼等流に屈折された神だった」（198）。「それが証拠には、五島や生月の百姓たちがひそかに奉じておるデウスは切支丹のデウスと次第に似ても似つかぬものになっておる」（243）。「日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない。日本人は人間を超えた存在を考える力も持っていない」（198）。「日本人は人間を美化したり拡張した

ものを神とよぶ。人間とは同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない」（198）等々。

たしかに、ここには第一章で見た、あの「顕偽録」中の一節、「其国ノ風俗ヲ見、吾法ニ思ツカザル国ヲ去テ」という史上のフェレイラがもらした言葉の一面が浮かび上ってきてよいでしょう。「切支丹が減びたのはな、お前が考えるように禁制のせいでも、迫害のせいでもない。この国はな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあったのだ」と小説中のフェレイラは語り（200）、さらに井上筑後守は「バードレは決して余に負けたのではない」（242）、「この日本と申す泥沼に敗れたのだ」（242）と、日本泥沼論が盛んにくりかえされます。

しかし、これら紋切型の観念を重ねることに、作者はどれほどの明確な意図を、なканずく宗門作家としていかなる解決のための方途を用意していたのでしょうか。実は、この「日本」の名においてキリスト教の不適合性を云々する議論は、和辻哲郎以来、その亜流として竹山道雄、会田雄次、梅原猛らが今日利用するところであり、また福田恒存がそこにキリスト教のキリスト教たるゆえんを感じているところだったのです。

また、小説家としては芥川竜之介が、例の皮肉まじりながら、これ以上のものはありませんと思われる繊細微妙なニュアンスをもつて冷笑しつつ問うていたのです。すなわち彼は小篇「神々の微笑」の中でバテレン・オルガンチノに、こう語らしめていました。「この国には山にも森にも、或は家々

の並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。さうしてそれが冥々の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私はこの頃のやうに、何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまふ筈はございますまい。ではその力とは何であるか、それは私にはわかりません。が兎に角その力は、丁度地下の泉のやうに、この国全体へ行き渡って居ります。まづこの力を破らなければ、おお、南無大慈大悲の泥烏須如来ノ邪宗に惑溺した日本人は破羅華増（天界）の莊嚴を拝する事も、永久にないかも存じません。私はその為この何日か、煩悶を重ねて参りました。どうかあなたの下部、オルガンチノに、勇氣と忍耐とを御授け下さい。——。その時ふとオルガンチノは、鶏の鳴き声を聞いたように思った。が、それには注意もせず、更にかう祈禱の言葉を続けた。『私は使命を果す為には、この国の山川に潜んでゐる力と、——多分は人間に見えない霊と、戦はなければなりません。あなたは昔紅海の底に、埃及の軍勢を御沈めになりました。この国の霊の力強い事は、埃及の軍勢に劣りますまい。どうか古の預言者のやうに、私もこの霊との戦いに、……』……オルガンチノは歩きながら思はずそつと独り語を洩らした。『この国の霊と戦ふのは、思ったよりもつと困難らしい。勝つか、するとその時彼の耳に、こ

う言ふ囁きを送るものがあつた。『負けですよ！』」（岩波文庫版113～118）。

そのほか、長与にしても、「外国の土に善く適ふか



らと言つてその木をすぐ日本へ持つて来て植ゑると言ふ事は間違つてゐる。日本には日本の桜がある」と秀吉に言わせ、島原の乱鎮定後、「一つ時はほんに日本全国上下を挙げて靡いた位えらい勢いぢやつたもんぢや。信長が本能寺で討たれた頃にや三十万からの生粋の信者がつた相な。それが此通り消え細る迄にやお上の仕打ちも随分と思ひ切つて酷いには酷いだったが、片つ方も、亦執つこいとも執つてもんぢやつた。がかうなつて見れや此国に切支丹が容れられなかつたと言ふなあ、夫が結局天主の御所存ぢやつたのかも知れんてな」と、「ひそかに切支丹に厚意を持つ人々」にもらさせていました（「青銅の基督」新潮文庫版719）。

このように、みながみなキリスト教側からの解答を待つているところだったので。それが、いかに小説家の気楽さとは言え、宗門作家が、それをなぞつて同じく日本泥沼論をふりまわすだけでは、あまりにも安易と言わなければなりません。それではメッセージに関するかぎり芥川等のもののほかに小説「沈黙」が存在する理由を有しておりません。

ひとところクリスチャン・ジャーナリズムがはやしたた福音の土着化的発想は私の同意するところではありませんが、さりとて、日本をもつて福音を変質する傾向において格別扱いすることの安易さや、センセーショナルリズムにも忍耐しかねるものです。私に言わせれば、日本を含めて世界が泥沼なのです。それを、『日本』は泥沼であると特別に言うのは、

「ヨーロッパやアメリカは清流で好いが、我々はこの泥沼の中に懊悩する」と、悲壮な大見得をきつてみせる芝居氣に通じていなければ幸いです。そして、実は日本泥沼論は、その見かけ状の悲壮さに似ず、その本性は意外な怠惰と独善と居直りに通じているのではないかと恐れるのです。

私は思うのですが、ヨーロッパやアメリカがどれほど福音に對して、豊かな天国性を有していたと言えるのでしょうか。かつてのギリシヤ人は、いや当のユダヤ人でさえ、その求めるところは微であり知恵であつて、十字架に釘けられ給いしキリストではありませんでした。そこに預言者たちの、使徒たちの戦いがあつたのです。そして、以後今日にいたるまで、いかに十字架の福音が徴と化し、知恵と化してきたことでしょうか。そこに改革者たちの生命がさげられたのです。

「基督教の神は日本人の心情のなかで、いつか神としての実体を失つていった」（196）、「この国で我々のたてた教会で日本人たちが祈つていたのは基督教の神ではない。私たちに理解できぬ彼等流に屈折された神だつた」（198）という、その「日本人」とある個所に「ドイツ人」、「アメリカ人」、「イタリヤ人」、あまつさえ「ユダヤ人」と入れかえても結構通用するものではありませんか。

福音を変質してしまうもの、たとえば絶対的人格神の義に裏うちされたアガペーの愛を万事肯定的博愛や「慈悲」に変質してしまう可能性にしても、「人間を美化したり拡張したもの

を神とよぶ。人間と同じ存在をもつものを神とよぶ」傾向にしても（198）、これらは何も日本人のみのもつ痼疾ではなくして、世界の、人間の現実なのです。ヨーロッパ、アメリカの神学史は、いかに神学を人間学に変えて行つたかを物語っています。マリヤを頂点とする聖人崇拜にしても、ヒトラー、スターリン、毛沢東と変遷する人間の美化・神格化にしても、決して日本人がおこなつたことではありません。

悲劇的な日本泥沼論の金切り声は、悲壮美の快感でなければ、忍耐つよい伝道の努力に堪えられぬ逃口上、言いわけに通じていなければ幸いです。「なまけ者は言う『獅子が外にいる、わたしはちまたで殺される』」（箴言22・13）。戦う前から懐ろ手で首をすくめる不真面目に墮すことのないように。

「もらいたくもなき品物を押しつけられるを有難迷惑と申します。切支丹の教えはこの押しつけられた有難迷惑の品によつて似ておる。我等の宗教がござる。今更、異国の教えを入れようとは思ひ申しぬ」風の声によつて（116、117）、真理の「普遍性」に目をつむる隠れんば主義や独善主義に通ずることのないように。他のいかなる風土いずこの国土にも福音が正しく宣べ伝えられて行かねばならぬように、この日本にも正しい福音が宣べ伝えられて行かねばならないのです。そこにはひたすらなる献身と努力あるのみなのです。日本泥沼論は、あくまで結論ではなくして、序論なのです。出発点なのです。いたずらに泥沼論をふりまわして判断中止の自慰行為に終つてはなりません。

もとより、その泥沼性ということにおいて、日本には日本

の特種相があります。しかし、そのことを語るのには、すでに本稿の域を超えており、他日を期することとして、終りに使徒パウロの言葉、それこそ二世紀の地中海世界という途轍もない大泥海に挑んで、日本に勝るとも劣らない深刻な異教的地盤に十字架を押し立てていった先輩パウロの痛心の言葉をあげて、この項のとどめとしましょう。

「我れは福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、すべて信ずる者に救を得させる神の力たればなり、神の義はその福音のうちに顕われ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し」と（ロマ書1・16、17）。

### 三、おわりに

そもそも、小説「沈黙」が出版されたのは（昭和四十一年三月）、ちょうど私がギリシヤンについて学んでいた最中のことで、その小説の著者が遠藤周作氏であり、その書名が「沈黙」であると聞かされたとき、何か「しまった」という氣持を抱かせられたのでした。それは、歴史上のフエイレラ自身、キヤラ自身の秘密、その恐るべき原体験の中から発せられた声が小説家によつて気ままに増幅され、濁世むきに巷間の軽口の話題となつて、手垢にまみれてゆくであろうことを予感したからでした。

たしか、亀井勝一郎が歴史の一番肝心なところは沈黙して

いる。語ろうとして語りえぬ深淵のようなものがある。そこで作家は虚構力をそそられ、宗教家は祈り、歴史家は多弁になると感想をもらしておられましたが、この小説で、また、以後各所でつづけられている遠藤氏の多弁と、「細欲<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>之、不<sup>レ</sup>解<sup>ニ</sup>文字<sup>一</sup>、審欲<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>之、依<sup>ニ</sup>五音別<sup>一</sup>而寡<sup>レ</sup>義乎」として終った史上のフエレイラの寡黙とを、読みくらべて、ただ祈りたい気持ちにかられるのです。

亀井は言います。「結果はロドリゴは雄弁すぎたのである。『小説』というもののこれが当然の運命かもしれない。『委ねる』という不立文字の境地に比べてつまらないものだ。作者の遠藤氏は、信仰の上から語ってはならないか、或は語りすぎてはならないものに到るところで直面した筈だ」と（『沈黙』の問題点二頁）。

私にはカトリック作家と言われる遠藤氏よりも亀井の方がよく宗教を知れる者のように思えるのです。せめて遠藤氏がこの重大な題材を、芥川のように戯画化することはありえないと同時に、思慮ぶかく、長与や堀田以上に突き放して書いていたらと思ったのですが、みずからが主人公となり、あまつさえキリスト自身ともなつて通俗化されてしまいました。

題名の「沈黙」とは、沈黙せる神の「沈黙」ではなくて、自分が語るために神に強いた沈黙の「沈黙」ではありませんでしたか。

むしろ題名を「饒舌」にしたら、とも思うのですが。もつとも、作者は初め「日向（ひなた）の匂い」と題したかったのだそうですが（『在家仏教』誌二〇五号・二五頁）。

ともかく、太平の世に住む作家と生々しい史上のフエレイラ、キヤラ、そして主イエス御自身とは重ならないのであって、その落差に小説家は己れの分際をわきまえねばならないでしょう。それほどに、歴史というものの、宗教というものは恐るべきものであった、と。

〔筆者は東京基督神学校教授・杉並教会牧師〕